

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行: 関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/index.jsp TEL:0798-54-6019



RCC『キリスト教平和事典』出版記念講演会 講演抄
 (二〇一〇年一月十三日・二十三日)

NPT再検討会議に向けて 未来を決める一〇〇日

広島平和文化センター理事長 スティーブン・リーパー



関西学院大学キリスト教と文化研究センターが、このようにすばらしい『キリスト教平和事典』を出版されたことを祝福し、感謝します。特に感謝していることは、「イエスの平和思想」という項目があることです。ここには明確にイエスは平和の象徴であり、生涯非暴力を貫いたと書かれています。これについて、日本の皆さんは、当然だと受け止められることでしょうか。米国ではそうではありません。戦争を支持するキリスト教徒が圧倒的に多いのです。ですから日本の信者が、イエスは平和を

説いた、非暴力を実践した、キリスト教信者だったら戦争はできない、というメッセージを米国に届けていただきたいのです。日本は欧米からキリスト教を学んだはずですが、欧米では本来のキリスト教のありかたが忘れられているので、日本のキリスト教の考えを逆輸入したいのです。

これは非常に重要です。米国で平和運動が分裂・弱体化している要因は、平和と正義のどちらが先にくるかという議論をめぐる二つのグループの対立にあります。平和主義者たちは、非暴力が先だと主張します。しかし、平和は正義の上に成り立っている」と主張する人は多いのです。

イエス・キリストは偉大な平和主義者だと私は考えています。水をワインに変えるなど、すごい力を持っていますし、イエスの

父なる神は全能の神なのです。イエスは拷問されて殺されますが、その人たちを罰したとか、報復したというような話はありません。それは、正義よりも平和が大事だということを教えているのだと私は理解しています。

さて、人間が戦争を棄て、非暴力に生きるというのは長期的な努力を必要とする問題だと思えます。何世紀もかかるかもしれません。暴力は人間の習性であり、これを正すのは容易ではないからです。

一方で短期的に解決すべき問題があります。この問題を解決しなければ長期的な問題、つまり暴力を棄てることは不可能であると思います。短期的な問題は核兵器で、これを廃絶しなければなりません。

これは喫緊の課題です。今年五月に核不拡散条約(NPT)再検討会議があります。ここで、



人類は核を廃絶することを決意しなければなりません。そうでなければ拡散に歯止めがからなくなり、たかさんの国が持つようになるでしょう。そうなれば、使われる可能性は高まるでしょう。ですから、われわれは、今、核を廃絶するか、使用するかを決めようとしていると考えてもいいでしょう。

NPTは、四十二年前の一六八八年に署名され、ちょうど四十年前の一九七〇年に発効しています。一九六四年に中国が核実験に成功し、欧米以外の国が核兵器を開発して五番目の核保有国になったとき、保有国は拡散を防ぐことが最大の利益だと考えました。この条約は核保有国と核を持たない国との取引です。保有国は核兵器を持ち続け、持たない国は核を作らない。代わりに保有国は平和利用のための技術を非保有国に与えるというものです。そうすることで拡散を防ぐことが目的でした。しかし非保有国が条約は暫定的な取り決めで、最終的にはすべての核兵器を廃絶することを目的にすべきだと迫りました。それで第六条が規定され、核軍縮に向けて誠実な交渉をし、最終的



には完全な軍備縮小への措置をとるという義務が課せられたのです。このことを四十年前も前に約束したのです。

冷戦中、米ソが超大国として支配力を誇り、互いに牽制しながら、核の優位を保っていました。一九九五年に非保有国は、条約の不公平性に苛立ち、冷戦は終わったのだから核を廃絶するよう再び迫りました。このため保有国が、再度、核をなくすと約束しました。それで条約が無期限に延長されることになりました。

条約の運用の再検討プロセスを強化するため、五年ごとに再検討会議が開催されています。

二〇〇〇年にあった再検討会議では、非保有国の連合体、新アジェンダ連合(NAC)が強力な圧力をかけたので、保有国による核廃絶の「明確な約束」をとりつけることができませんでした。

ブッシュ政権時代の二〇〇五年、米国が強硬な姿勢をとり、米国は軍縮など視野になく、核不拡散についてだけ議論すると宣言しました。同時多発テロがあり、世界はテロに対する戦争の真最中で、そんな危険なときに核兵器を廃絶するなどもつてのほかだということです。それに対してアラブ諸国などが強く反発し、保有国が廃絶しないのであれば、我々も核兵器を持つと叫び出したのです。それで二〇〇五年の再検討会議は空転し、最終文書を出すことすらできませんでした。

今年五月の再検討会議は

きわめて重要です。前回の過ちを繰り返すのであれば、条約は形骸化し、NPT体制は崩壊しかねません。しかし、幸運にもバラク・オバマ大統領が誕生しました。前回の準備委員会では、これまでの対立姿勢は一掃され、各国代表がオバマ大統領

領のプラハ演説の抜粋を読み上げ、核兵器のない世界をめざす決意を表明するという協力的な雰囲気になりました。

希望は見えましたが、楽観は禁物です。オバマ大統領のプラハ演説に軍需産業は猛烈な反撃を開始しました。メディアを使って、廃絶など現実性がないなど徹底的な大統領批判を繰り返しています。

今、世界をみると、廃絶派と反廃絶派との間で、廃絶を先送りしようという妥協案が出ています。それは、日豪政府が協同イニシアチブをとる核不拡散・核軍縮に関する国際委員会(ICNNND)の報告書に見ることが出来ます。当面は、米口が弾頭を削減し、包括的核実験禁止条約(CTBT)を批准して、兵器用核分裂物質生産禁止条約(FMCT)を成立させることで精一杯だから、二〇二五年になって核兵器をゼロにすることを議論すべきという内容です。日本のNGOによるとこれは核産業による圧力からということ。しかしこれではアラブ世界は納得しません。約束してから四十年もたっているのです。もう我慢の限界です。

もう一つのチャンスは、エリートたちに危機感が出てきたことです。これまで、世界の核兵器はエリートたちがコントロールしてきました。彼らは自分たちに有利に働く今の政治経済システムを壊したくありません。しかし、世界ではこのシステムに抑圧され、苦しんでいる人が加速度的に増えています。こんなシステムなどないほうがいいと考えている人たちは大勢います。

テロというイスラム教原理主義者と考えがちですが、世界に見捨てられ、日々の生活に事欠き、怒りに燃えた人たちは自爆も復讐も恐れていません。そういう人たちが核兵器を手に入れたらどうなるでしょう。今の世の中では抑止論など通用しないのです。

今年五月が山場です。そして日本の役割は重要です。米国はあてになりません。オバマ大統領は本気で核兵器のない世界を望んでいます。一方、彼は軍事大国の大統領です。ですから外圧が必要なのです。今、ヨーロッパからの外圧は働いていますが、日本からの外圧はまだまだです。これを大きくしていかなければなりません。

鳩山首相は国連で、廃絶に向けて「唯一の被爆国として先頭に立つ」と演説しています。岡田外相も核軍縮に意欲的に取り組む姿勢を見せています。衆参両院も核廃絶への取組み強化を求める決議を可決しています。

オバマ大統領とホワイトハウスは核政策の方向転換を図っていますが、ペンタゴン(米国防総省)は核兵器に固執しています。それで、十二月に発表される予定だった米国の核態勢見直し(NPR)が三月に先送りされたのです。この対立が解消できないからです。ペンタゴンが利用している口実は日本です。ワシントンの信頼できる活動家によると、日本が核の傘を要求しており、それがないと自分の核兵器を作るというメッセージを送ったというのです。それに対して鳩山首相はきちんと反論すべきです。日本には非核三原則があり、憲法九条があるから核は持ちませんときっぱり否定していただきたいのです。しかし日本政府の態度はあいまいです。

だから今必要なのは、日本の草の根レベルからの声です。皆さんから、日本政府に働きかけ

てください。そうすれば、日本政府も米国に圧力をかけることができるはずですよ。

平和市長会議では二〇二〇年までの廃絶をめざす「二〇二〇ビジョン」キャンペーンを繰り広げ、その道筋を示す「ヒロシマ・ナガサキ議定書」を推進しています。五月の再検討会議で日本政府がこの議定書を提案す

ることが理想的なのですが、それができなくても保有国に交渉を始めなさいと言っていたら、それは世界の大衆の国は後押しするでしょう。そして、ヒロシマとナガサキは日本の都市なので、日本がリードすべきだと思います。

第四十一回RCCフォーラム講演抄(二〇〇九年十月五日)

小田実と歩いた世界

作家・星槎大学教授 小中 陽太郎

小田さんと歩いた道の話をしたいと思います。

私も小田さんも戦争の中を生き抜きました。東京大空襲では十万人。広島が十七万人、普通三十万人といいますが、十七万人だと思えます。沖縄も長崎も十万人として、それだけの累々たる死体の中で生きてきたのです。戦争と災害、その中で私たちは生きているのだということ、を押さえておきたいと思えます。

それは、伊勢湾台風があった

年、私が二十二歳の時でした。

NHKで働いていた私は、名古屋でドラマを作ろうと思いつきました。そのときにドキュメンタリですが、ちょうどアメリカから帰ってきた、『何でも見やろう』というベストセラーを書いた男がいました。これはよさそうだと思つて、電話をしたら、彼もテレビに興味があつて、私たちは四日市合成ゴム工場を中心にドラマを作りました。その

ドラマができたのが、一九六二年、東京オリンピックの二年前でした。小田さんとドラマを作ったのですが、その後、私はNHKを辞めてしまいました。東京オリンピックの頃は東京に戻っていました。一九六四年です。一九六五年の二月八日にアメリカ軍はベトナムのダナンに上陸をしました。私たちはびっくりしました。そのとき、小田さんは大阪大空襲を思い出したそうです。

八月の十四日です。敗戦直前です。その大空襲で大阪で七万人ぐらいの人が死に、彼も命からがら生き延びたのです。彼の家は桃谷ですから、ちよつと丘の上で、そこは大丈夫だったのかも知れません。ともかく彼は九死に一生。その体験をもとに彼が書いた論文が、「難死の思想」です。難死という字は難儀の難。難しい、難儀して死ぬ。これは三島由紀夫の殉死とか、天皇陛下に殉じて死ぬとか、そういう死とはちがいます。大阪のあの人は殉死したのではない。無駄死にだった。特に八月十四日には、もうポツダム宣言の受諾は決まっていたのです。なぜ



爆弾を落としたかもわかりませんが、なぜ日本も戦い続けたのでしょうか。ですから、これは全く無意味な死であつたというのが小田さんの有名な論文です。

これがベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)の思想です。難死の思想。私たちの基本的な思想です。ベ平連の根本思想は難死の思想です。人は無駄に死ぬではならない。ですから死ななための運動です。

ベ平連の運動との関係で、私は小田さんと二人で、ベトナムに行きました。夕方でした。水牛が水浴びをしていました。向こうに夕陽が沈んで、きれいなのですが、私もほとんどあきれだろつと。私はNHKでテレビドラマを作つていて、小田実は『何でも見てやろう』の大ベストセラー作家、この二人の男が、なんだか水牛の後ろにいて、少

年が水牛の背中を洗っている。「小田さん、何故俺こんなところにいるんやろう」と聞いたんです。私は東京育ちですが、小田さんといると多少の関西弁になります。小田さん、なんて言つたと思いませんか。「そやなあ、宗教みたいなもんやろなあ」と言いました。小田さんの、この答えはわからないですよ。「宗教みたいなもんやろなあ」というのは、宗教者のみなさんは大事だけれど、普通の人は物好きだとか、鯛の頭も信心とか、好き好きなんだと言ふこと、つまり、「俺たち、好きだからやつてるんだ」という答えだと思えます。私はそういうものかと思つて、一緒についていきました。小田さんもそのことは非常に不思議だつたようです。ある人が、バートランド・ラッセル、イギリスの有名な数学者、哲学者に、「サー・バートランド・ラッセルよ、どうして、あなたのような偉い人が、平和運動をやっているのですか」と聞いたのです。彼はなんと答えたと思えますか。「他に何かあるかね」と言つたんです。これもなかなかいいですね。だから平和運動は誰のためとか、

苦しんでいる人のためというのは、後からつけた理屈です。「他に何かあるかね。」あるいは「宗教みたいなもんやね」と。あなたがやるんだということですね。

僕は小田さんと「難死の思想」を信じていたのですが、ベトナム戦争が終わった後、まだキリスト教徒ではないとき、妻に連れられてキリスト教の教会に行きました。牧師がガラテヤ書というのを読んだ。ガラテヤ人への手紙というところで、キリストの直接の弟子ではない、パウロという人がいて、その人は手紙魔らしくて、いっぱい手紙を書いた。パウロの基本的な考えは親鸞と非常に似ていて、自分の努力によって救われるのではないと。いいことをしようが、悪いことをしようが、そうではなくて、イエスキリストが救ってくれる。ただし、信じなければだめだ、ということらしいのです。その台詞の中に次のように書いてあった。「もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます」と。ということは、キリストは無駄に死んだのではないという



ことを言っている。キリストは難死したのです。十字架の上で矢でやられて死ぬわけですから。だけどそれは無駄ではなかった。それで、私は考えた。つまり市民運動は一言で言うと、生きていく人のためのものです。おびただし、たくさんの人々が死んでゆきました。伊勢湾台風でも死んだ。原爆でも死んだ。沖縄でも死んだ。ベトナムで四〇〇万人が死んでいるときに、これは止めようと考えるのは当然でしょう。それは正しい運動だと思ふのです。だけど、もし全員が生きたとしても、どんなに

生きても、一二五ぐらいまででしょう。そのへんで死ぬでしょう。どんなに逃げたつて。もし、人間が死んだら無であつたら、あらゆる人間は無です。そんなことはないでしょう。大阪大空襲で死んだ十万人は無駄ですか。無駄じゃないですよ。あるいはベトナムで死んだ四〇〇万人は、アメリカ兵も五万人死にました。無駄かといったら、それは無駄ではない。沖縄で死んだり、白旗を掲げた少女たちの死は、死なないうが勿論いい。だから僕は平和運動をやります。あの人は死んだら無駄ということはないのです。それで、僕は、それならキリスト教を信じてもいいと思つたのです。キリスト教の中で小田さんの難死の思想を考えてみると、僕は小田さんを愛していますが、そこが足りないと思つたのです。小田さんの死生観はそこが足りないという本を書きました。私たちがベ平連をやったときに、市民というものはイデオロギーにとらわれてはいけないと、組織をつくることに反対したので

す。そのために組織政党からもすぐく批判されました。小田さんの文学は素晴らしいけれど、文学だけで判断するな、というのが私の意見です。

に運動した。本当に地に着いた市民運動に彼は戻ったのです。そこが素晴らしい。長い長い小説を書いたり、核兵器に反対だ、賛成だということは、やがて忘れられます。これが小田さんと歩いた道です。ありがとうございます。

編集後記

キリスト教と文化研究センターは昨年『キリスト教平和事典』を出版しました。今回のニューズレターでは、平和学事典の推薦文を書いていただいた作家の小中陽太郎さんと出版記念講演会の講師を務めてくださった、広島平和文化センター理事長のステイブン・リーパーさんの講演抄をお届けいたします。小中さんが講演題とした「小田実と歩いた世界」は同名で小中さんが昨年、講談社より出版された本に基づいています。この本が出版された時、梅田のジュンク堂書店で出版記念会がありました。「ベ平連」の時代に小田実と親しかった人たち、米国の脱走

兵を家にかくまった人たち、等々が集いました。本には七〇年代の小田と小中さんの歩みのみならず、その周辺にいた人々の秘話などが書かれています。どうぞお読みください。

米国人で初めて広島平和文化センターの理事長となったステイブン・リーパーさんには、NPT再検討会議に向けて、日本政府や市民への働きかけに東奔西走の忙しさの中、講演をしていただきました。「ヒロシマ・ナガサキ」の体験を風化させないためにも、核兵器廃絶の声を上げることが、今、必要とされています。

RCC主任研究員・商学部教授

山本 俊 正